【福井県指定無形民俗文化財】

勝山左義長まつり

福井勝山に春を呼ぶ奇祭

浮く【うく】

まだ雪が多く残る2月終わりの勝山市。「勝山左義長まつり」が近づき、通りに色とりどりの短冊がなびくと、寒い冬が終わり春の訪れを喜ぶ人々の気持ちとともにまつりを迎える高揚感で街全体が包まれる。〝春を呼ぶ奇祭〟としても知られる「勝山左義長まつり」は、旧勝山町域の13区で、毎年2月の最終土日に開催。その始まりは、江戸時代に小笠原氏が勝山藩に入封した時期とされ、300年以上の歴史がある。平成20年(2008)には「勝山左義長」が福井県の無形民俗文化財に指定された。

まつりの特徴は、12の地区で建てられた櫓の上で赤い長襦袢姿の男衆や子どもたちが、三味線や笛、鉦のお囃子とともに太鼓を打ちながら1日中浮かれ踊ること。この様子を「浮く」と言

蝶よ、花よ

い、昔、遊郭にいた若者が、遊女の赤襦袢を着て櫓に上がり太鼓を叩いたことが始まりとされている。独特のおとけ仕草で、お囃子の軽快なテンポにのって浮かれる様は、全国各地に伝わる左義長の中でも勝山左義長だけのものであり、これが〝奇祭〟とされる理由である。

囃【はやし】

花よのネンネ

まつり当日、「一番太鼓」（毎年12地区で持ち回り）を合図に各地区の櫓で左義長ばやしが始まると、街なみは一気に賑やかに。

優雅で上品、時に力強く、そして笑いも誘う「浮く」姿。この独特の情緒感は、江戸の勝山城下の下町文化を土台に、昭和には繊維産業で活気づいた近代勝山市の花柳界などの芸能文化も融合し、時代とともに変化しながら現在まで伝わってきたもの。

太鼓は勝山左義長ならではの短いバチで叩く。一人は「地」と呼ばれる単調な三ツ打を刻み、もう一人が踊るように叩く。そして他の楽器と音を調整するために太鼓に腰掛け音を抑える役

の三人が一体となって「浮く」。決まった演奏法はなく、各地区で動きやテンポに違いがあるのも見どころだ。

左義長ばやしの曲目は「だいづる」「御大典(ごたいてん)」「金毘羅舟々(こんぴらふねふね)」「七調目(しっちょめ)」「戦友(せんゆう)」の5つ。よく聞かれる「蝶よ、花よ、花よのネンネ」の曲は「だいづる」である。

これらは元々お座敷歌として古くから唄われ、男と女の戯れ唄だったと考えられているが、いつ頃から左義長で唄われるようになったかは定かではない。

櫓では、演奏する「囃し方」が座る場所の序列など、さまざまな礼儀作法が守られている。これは代々の主によって小笠原流礼法が重んじられ、厳しく指導されていたためである。

日中、櫓に上がるのは主に子どもたち。昭和45年(1970)に始まった「子どもばやしコンクール」が2日目の日曜に行われ、各地区が日々の練習の成果を競い合う。

日が暮れてくると大人たちが次々と登場。曲の合間の「浮いた、浮いた」の掛け声もどんどん熱を帯び、櫓の賑わいは夜遅くまで続く。

子

酒

通りには、世相風刺や政治・行政問題など、幅広い話題をテーマに句が書かれた「辻行燈」が掛けられている。これは江戸時代に、勝山藩主の小笠原氏が庶民の気持ちを古川柳や狂歌に託すことを許したのが始まり。

個性的な絵とともに思わずニヤリとなる句は、道行く人を楽しませ、時には考えさせる。夜

まだ乳飲むか

落【しゃれ】

になると灯が入り、まつりを幻想的な雰囲気にするのにも一役買っている。

また、通りから見えるように飾られた「作り物」も、まつりの楽しみのひとつ。始まった時期は定かではないが、江戸時代から続く「勝山にわか」の流れを汲み、日常生活道具の形を活かしてその年の干支を即興的に作り上げることが特徴。作り方は各地区で継承され、今では見られなくなった古道具が使われることもある。作品には、主旨を短歌で表現した「書き流し」が必ず添えられ、一枚には作品の意味や訳を書き、もう一枚には素材やモチーフからもじった洒落が盛り込まれているのも面白い。

各地区の櫓の左義長ばやしが最後の盛り上がりを見せているまつり2日目の午後8時を過ぎると、法被姿の12地区の区長・年番長が神明神社に集まってくる。

午後8時30分より神事。左義長まつりは鎮火祭とも深く関係があり、火を崇める火祭りと合わせ、神社に祀られている「火産霊神(ほむすびのかみ)」の御火をいただく。

小さな御火から篝火に点火されると、真っ暗だった境内がほんのりと明るく。その中で12地区の区長が一人ずつ篝火からたい

御神火【ごしんか】

まつに火をいただいた後、列になって神社から「どんど焼き」会場の弁天河原へと向かう。

御神火の列は、まだ見物客で賑わっている櫓の近くをゆっくりと歩き、約500メートル先のどんど焼き会場に到着する。

そして、まつりのフィナーレを待つ多くの人が静かに見守る中を、御神火は弁天河原へと下りて行く。

火柱

【ひばしら】

弁天河原には午後のうちに各地区の御神体が運び込まれていて、14の御神体を点火を待つ多くの人々が取り囲む。

御神体は、まつりの2日間、各地区の櫓の前に立ててあったもので、中央に4メートルほどの「心」と呼ばれる松の生木を立て、周囲を4本の竹で四角すいに組んだもの。松飾りの頂上には日の丸扇子で飾られた御幣を取り付けている。さらに各家庭から集めた正月飾りやしめ縄、御札、子どもたちの書き初めなどが御神体に積み上げられている。

午後9時。のろしが上がると一斉に点火。いくつもの火柱が冬空に高く舞い上がる光景は圧巻で、まつりはいよいよクライマックスを迎える。

「どんと焼き」は、まつりで御神体の松飾りに招いた「歳徳神」を、五穀豊穣とともに鎮火を祈願しながら天に見送るという左義長本来の神事。多くの人々がそれぞれの願いを胸に、寒さを忘れてゆらめく炎を見つめる。

火が静まるとこの残り火で長い竹に刺した餅をあぶって食べ、2日間にわたるまつりのすべての行事が終了する。

まつりが終われば大雪が降ることはない。厳しい冬に終わりを告げ、春を呼ぶ奇祭は、これからも勝山の人たちの〝心の拠り所〟となる貴重な文化遺産として、市民の手で未来へと受け継がれていく。

乳首はなせ、

乳首はなせ。——

〔左義長ばやし〕

《左義長の見どころ》

辻行燈【つじあんどん】

申年は
よく見よく聞き
よく話そう

「絵行燈」とも呼ばれ、昨今の話題や問題、庶民の願望、世相を風刺した川柳に挿絵が添えられている。各地区で作られており、笑えたり、納得したり、時には考えさせられたりと種類に富む。

後年の参考にもなる挿絵と川柳を。

行燈作りに携わって約40年。老若男女、多くの人に描いてもらうことが芳野地区の特徴です。いくつかの大行燈は地元保育園に依頼。園児たちの挿絵は元気があり、見物客を笑顔にしてくれます。川柳は難しいですが、地元壮年会では川柳教室を開催し、勉強するほど力を入れています。川柳を考え、それに合う挿絵を考え描く……。絵柄が思い浮かばなくて悩むことも多々、ありますが、皆で思案、相談するのも楽しいひと時です。芳野地区は、先に挿絵を描き、そこに川柳を書く一発勝負。川柳書きはかなり緊張しますが、その緊張感も勝山左義長ならではです。挿絵は、後年の参考にデータ化して保存しています。

《芳野地区》
笹木茂紀さん

短冊【たんざく】

まつり1週間前になると、町中に色鮮やかな短冊が吊るされる。「緑・黄・赤」「白・青・赤」など、地区ごとに組み合わせは異なる。

手作りに込められた絆。

1年に一度、全地区民に呼び掛けて短冊作りをしています。沢地区は広範囲なので短冊数も多く、その数なんと約6000枚! 久しぶりに会える人もいておしゃべりに花が咲く一方、皆、慣れたもので、手元では貼ったり、結んだりと確実に作業を進めています。短冊作りに要する時間は数時間ですが、皆で祭りを準備する喜びや楽しさ、絆を実感できるひと時でもあります。ちなみに、短冊の色は火消しの纏の色にも準じていることから、鎮火の願いも込められているんですよ。

《沢地区》北山謙治さん

作り物【つくりもの】

江戸時代から続く「作り物」は生活道具を使い、その年の干支や時世を表したもの。遊び心ある書き流しも作品の一つとして楽しみたい。

道具の使い方と遊び心にも注目を。

父親から受け継ぎ約40年、上袋田区の作り物を手掛けています。勝山左義長の作り物は台所用品や大工道具など、同じジャンルの素材を使う"一式作り"が特徴。特にうちの区は作品を四方から眺められる飾り方なので気が抜けません。道具選びはもちろん、道具の扱い方や書き流しに込めたユーモアも見どころです。

《上袋田地区》丸屋仁志さん

《左義長の見どころ》

男衆・櫓

【おとこしゅう・やぐら】

まつりを象徴する12地区の櫓と、そこを舞台に「浮く」男衆。それぞれの伝統を受け継ぐ浮き姿は必見！

下袋田

現在の櫓は元々あった櫓の形を継承し、平成17年に完成したもの。「花櫓」をテーマとし、桜の花飾りで華やかに彩られている。かつては階段状に3番櫓まで作られていたのだとか。

上袋田

明治16年に完成した櫓で、12地区の中で最も長い歴史と大きさを誇る。屋根の垂木を2重にすることで、軒のせり出しを大きくしているのが特徴。彫物などの細工にも注目を。

下長渕

明治29年の大火の中、一地区民の蔵で守り抜かれたという櫓。お宮の拝殿型で、屋根が2重になっている。「子どもばやしコンクール」では上位入賞の常連、大人の超早リズムも見どころ。

上長渕

12地区最少戸数で、櫓がない地区からの応援も多い。見通しの良い通りに位置し、常に見物客が多いのも特徴。毎年ここで「勝山左義長ばやし保存会」の模範演技が行われている。

沢

設計は地区在住の若手設計士。平成22年、3つの重要文化財を基に歴史と伝統を重んじつつ、"新しいけれど昔ながらの形"を完成させた。夜は後方に設えた障子に灯りが美しく映える。

芳野

昔は沢地区との合同櫓だった。老朽化に伴い地区の象徴である櫓を作ろうと地区民で積立てし、平成3年度に完成。まつりでは地区民がアイデアを出し、さまざまな企画を開催している。

－元町二丁目－
坪内友幸さん
子どもから中高生、20代と若い人が多く賑やか。「だいづる」の替え歌もありますよ!

－立川－
島田正儀さん
最初はゆっくりの所作が、曲の佳境で太鼓打ち主体になり激しくなるところが見せ場です!

－上郡－
笠松与祥さん
物心ついた時から櫓に上がっています。見る人を巻き込む「浮き」が上郡流です!

－下後－
亀井崇史さん
祖父から受け継いだ褌袢を着て、得意の女形の浮きで櫓を盛り上げます!!

－中後－
壁本孝治さん
心からの笑顔を大切に、どんど焼きの炎のような動きを意識しています。

－上後－
大関政克さん
娘と二人で櫓に上っています。世代を超えて伝統を伝え継ぎたいですね。

元町二丁目

昭和55年から左義長まつりに加わった地区で、現在の櫓は2代目。囃し方が座る場所は1段高くなっている。新しい地区だからこそ、基本に忠実な左義長ばやしを心掛けている。

立川

平成27年で完成から100年。当時の立川の住民がお金を出し合って作ったと文献にも残っている。子ども用の舞台は可動式で2日目の夜には移動し、大人用舞台の正面も変わる。

上郡

今では数少なくなった、まつり前日に組み上げる櫓。屋根は約100年前の完成当時の形をほぼ残している。1段低い子ども用の舞台があり、大人用と2段同時に太鼓を叩くこともある。

下後

「どこからも見やすい櫓」「見て楽しい櫓」をコンセプトに作られ、太鼓を2つ並べられるほど広い横幅を持つ。櫓の高さも低めで、通りを歩く人からも見やすいよう設計されている。

中後

神明神社を新築する際に使われたものと同じ御神木で建てた櫓。平成15年には櫓会館も完成し、通りから見えるところにあるからくり人形や、地区名を書いた大きな看板も特徴。

上後

昭和3年に建てられた切妻造の櫓。左義長囃子は打ち方などに色々な変化をつけて打つ曲太鼓の流れが受け継がれ、テンポは速め。学生の打ち手や親子で櫓に上る人も多い。

〈お問い合わせ〉
勝山左義長まつり実行委員会事務局
（勝山市観光政策課内）
0779-88-8117
〒911-8501 福井県勝山市元町１丁目 1-1
http://www.city.katsuyama.fukui.jp/kankou/sagityo/